美容整形経験者に見られる「本当の自分」感についての考察

法政大学キャリアデザイン学部４年　松下　愛子
法政大学キャリアデザイン学部　教授　遠藤　野ゆり

１．はじめに

１―１　本研究の関心

本研究は、近年若者を中心に身近なものとなってきた一方で、依然として賛否両論のみられる美容整形に関するものである。美容整形に関しては、以下に詳述するように、ポジティブな見方が増えてきている一方で、美容整形後の身体を「偽物」、それに対し整形前の身体を「本物」と捉える向きも多い。身体は自己感に重要な意味をもつがゆえに、不可逆的な結果をもたらす美容整形に対する抵抗感も生まれてくる、と考えられる。

では、美容整形の施術を選択した者は、自身の身体や、そこに付随する自己感をどのように捉えているのだろうか。この点を検証することで、美容整形やそこにまつわる自己感に関する若者の意識を明らかにすることが、本研究の関心である。

１－２　本研究の社会的背景

世界第三位の施術数ともいわれる[1]日本の美容整形は、若年層を中心に、より広がりを見せている。例えば、株式会社矢野経済研究所の調査[2]によれば、2019年には美容医療市場規模は4070億円に達しており、2014年の2833億円と比して、わずか5年間で43.7％も拡大している。正確な数はわからないが、おそらく施術数も増加し、それと共に、美容整形が身近になりつつある、と考えられる。実際、美容外科『東京イセアクリニック』[3]が2019年に行ったインター

ネット調査[4]では、周囲に美容整形した人がいると答えた割合は、28.0％におよんでいる。世代別に見れば、20代（32.3％）、30代（29.6％）、10代(16.4％)の順に高く、20代以降に美容整形は特に身近なものとなっていることがうかがえる。また同調査では、「美容整形」と聞いて、ポジティブ（好意的）な印象をもつと答えた割合は52.0％で、ネガティブ（否定的）な印象をもつと答えた割合（48.0％）を超過している。「『整形をしたい』と思ったことはありますか？」という質問には、「とてもある」「すこしある」を合わせると、58.7％が「ある」と回答しており、「まったくない」の41.3％を上回る結果になっている。こうしたことからは、日本の美容整形は、施術数も、市場規模も拡大し、それに美容整形に対する意識もまた大きく変わってきている、と考えられる。

他方で美容整形は、これまでも、そして現代もなお、しばしば抵抗感をもって受け取られることがある。そもそも、美容整形をポジティブと捉えるかネガティブと捉えるか、という問いの提示自体が、美容整形にはネガティブな見方が根強いことを表している。こうしたネガティブな評価や印象は、美容整形そのものへの抵抗感と、美容整形の背景に対するネガティブな印象と分けることができる。

美容整形そのものへの抵抗感には、美容整形によって得られた身体を「人工物」「偽物」と捉える認識が含まれている。これは、施術前の身体を「本物」とみなす感覚とセットである。さらに、そうした「本物」の身体に対して、「メスを入れる」「改造する」「手を入れる」ことは、本物の身体に対する不適切な態度である、といった認識も指摘できる。

また、美容整形の背景に対するネガティブな印象としては、医療の専門家である精神・神経科医の白波（2004）による、「美容外科を希望する人々は、自分は醜いと劣等感をもって」いるといった見識が、その典型例として挙げられるだろう。N. A. Rudd と S. J. Lennon（1999）らからも、「男性は女性に身体的魅力があることを非常に好ましいことと考える」という前提のもとで外見の魅力が「女性にとって他者への社会的勢力ないし社会的影響力の第一の源泉」であって、女性たちの美容実践は「外見が生み出すいくらかの報酬を手に入れることを目的として」なされているという指摘もある。さらには、北陸大学東アジア総合研究所所長といった社会的な立場のある叶の、日本だ

けでなく「東アジア諸国での美容整形ブーム」が、就職において「容姿も重要な要素と考えられる」（韓国）ことや、「ファッションや芸能分野などで欧米的容姿基準が商品性の高いものとして打ち出されており、その基準を受容するアジア社会の中ではグローバル企業・市場受けするために素顔を物理的に変形することが得策」となるといった「グローバルメディアが創出するビューティー・スタンダードの浸透」などの指摘が、拍車をかける（叶,2011,p.68）。叶は、美容整形を、「厳しい競争環境の下でなんとしてもチャンスを掴もうとする女子学生たちの逞しい行動なのであろうが、複雑な思いに駆られる」と締めくくっている（叶,2011,p.68）。

こうした議論は、一面において正しいが、一面においては多くの誤解を含んでいる。この点について谷本は、外見に自信のある人（外見 が良いとみなされる人）が自信のない人よりも美容整形を希望しており劣等感という説明だけでは成立しないこと、実際の整 形実践者たちの多くが「異性へのアピール」を否定し「自己満足」「自己の心地よさ」の ために整形を行うと語ることを指摘している（谷本 2008）。

１－３　先行研究

美容整形に関しては、主として医療的な技術側面からの研究のほかに、美容整形をする人の意識についてや、美容整形の背景の検討が見られる。

美容整形の背景として、日本の若者の自尊感情の低さ、特に美容に関する自己評価の低さの指摘などが指摘されている。また、美容に関する意識の中では、川添（2011）が明らかにしているように、自我意識が流動的であることや、身体感覚のあいまいさが指摘されている。

また、美容整形には偏見も多い。谷本(2008,2017)は、美容整形に関する誤解を明らかにし、一般的な理解とは異なり、美容整形をする人は容姿にコンプレックスともっているわけでもないことや、美容整形においては異性よりも同性の目を気にしていること等を指摘している。

以上のことからは、美容整形について、人々の意識が変化しつつあること、その変化は、単なるサービスへのポジティブ･ネガティブな反応だけではなく、人のアイデンティティや身体感覚や自己認識に関する変化と連動しているこ

とが明らかになる。

１－４　本研究の追求課題

したがって、本研究で追究したいのは、美容整形を通して見えてくる、身体とセットになって感じられる自己感の違いである。これは、美容整形に対する抵抗感の有無から見えてくる。そこで、美容整形を経験した当事者の自己感を明らかにしたい。

１－５　研究方法

本研究は、インターネットでの質問紙調査と、インタビュー調査との混合調査で実施した。

インターネットによる質問紙調査は、美容整形に関する大学生の一般的な意識を調べることを目的に、大学生を対象に、Googleフォームを活用して実施した。2022年7月～11月に実施し、筆者（松下）自身の知り合いや、SNSを通して回答を得た。その結果、73名からの回答を得た[5]。

インタビュー調査は、美容整形を実際に経験した4名に、半構造化インタビューを実施した。対象者は、筆者（松下）自身の知り合いと、SNSでの募集に応募してくれた人とである。インタビューは2021年11月～2022年4月に実施した。1回あたり、1時間から2時間程度実施し、インタビュイーの許可を得て録音したものを逐語で文字起こしした。

質問紙調査、インタビューのいずれも、研究を目的とした調査であること、回答は任意であること、辞退したくなればいつでも辞退できることを伝えた。

２．アンケート調査からみられる美容整形に関する大学生の意識

２－１　アンケート調査の概要と結果

アンケート調査の結果、回答者について以下のことがわかった。

第一に、美容整形をした経験のある人は9.6％、未経験者は90.4％である。クロス・マーケティング社による2010年の調査では、18歳～39歳女性の美容整形経験率は11.3％となっているが[6]、今回の調査はより経験率が上昇したと推察される2022年に実施されたこと、一方で回答者が20歳前後の大学生に限定

されていること、回答者の性別を限定していないことを加味すると、極端な回答者の偏りを感じさせる差だとはいえない。

第二に、美容整形の未経験者に対する「美容整形に興味関心はありますか」という質問に対しては、興味あると回答した者が61.5％、興味ないと回答した者が38.5％であった。回答者73名のうち、美容整形の経験もなく興味もないという回答者は34.8％ということになり、3人に2人は美容整形に対する経験や関心がある、といえる。

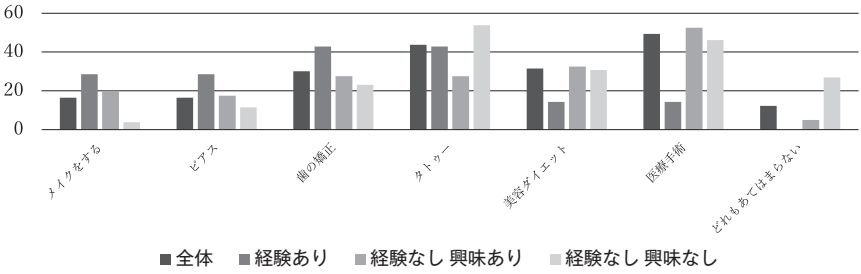
第三に、美容整形施術という行為の重みについて質問した。「美容整形と比較してどのような重さの違いがあるか。『似たようなもの』だと感じるか、『全く質の異なるもの』だと感じるかを考え、『似たようなもの』だと感じるものすべてを選んでください。」という質問で、①メイクをする、②ピアスの穴をあける、③歯の矯正、④タトゥー、⑤美容ダイエット（理想に近づくためのダイエット）、⑥医療手術、⑦どれもあてはまらないの7つの選択肢を提示した。その結果、「回答者全体」「美容整形経験あり」「美容整形経験なし・興味あり」「美容整形経験なし・興味なし」群にそれぞれ分けると、図表1のような回答率であった。以下、図表の示す数値の単位は％である。

＜図表1　美容整形との重さの比較（％）＞

		メイクをする	ピアス	歯の矯正	タトゥー	美容ダイエット	医療手術	どれにもあてはまらない
全体		16.4	16.4	30.1	43.8	31.5	49.3	12.3
経験あり		28.6	28.6	42.9	42.9	14.3	14.3	0.0
経験なし	興味あり	20.0	17.5	27.5	27.5	32.5	52.5	5.0
	興味なし	3.8	11.5	23.1	53.8	30.8	46.2	26.9

上記の表を視覚的に捉えやすくするため、図表2のようにグラフで示す。

＜図表2　美容整形との重さの比較（%）＞



第四に、美容整形に関してイメージすることを、自由記述形式で記入してもらい、その記入内容を、「ポジティブな記述」「ネガティブな記述」「ニュートラルな記述」に分類した。「ポジティブな記述」に分類したのは、「**自信が持てる**」「**良い**」「**努力**」といった、美容整形に対する肯定的な記述である。「ネガティブな記述」に分類したのは、「**お金がかかる**」「**リスク**」「**怖い**」といった[7]、美容整形に対する不安や否定的な心情・態度を表す記述である。「ニュートラルな記述」に分類したのは、「**以前より手軽になった**」「**みんながやっている**」「**特にない**」など、客観的な事実のみを記述したものを分類した。記述には、ポジティブ・ネガティブ・ニュートラルの混ざった記述も見られたが、そうした場合には、記述を細かく分割し、それぞれカウントした。例えば、「**以前は整形が否定される風潮があったが、現在は二重整形や鼻整形などYouTuberなどの著名人が公表してきていることもあり、受容されてきているイメージがある。**」という記述は、「以前は整形が否定される風潮があった」の部分をネガティブな記述に、「現在は二重整形や鼻整形などYouTuberなどの著名人が公表してきていることもあり、受容されてきているイメージがある」をポジティブな記述に分類した。その結果、美容整形に対する経験や興味の有無によって、図表3のような記述の違いが見られた。

＜図表３　自由記述でのポジティブ・ネガティブ・ニュートラルな表現の回答率（%）＞

経験		ポジティブな記述	ネガティブな記述	ニュートラルな記述
全体		63.0	47.9	23.3
経験あり		100.0	42.9	0.0
経験なし	興味あり	67.5	47.5	22.5
	興味なし	46.2	50.0	30.8

２－２　考察

以上のことからは、美容整形の経験や興味の有無が、美容整形に対して抱くイメージと、強い関連があることが指摘できる。

図表1､2からわかるように､美容整形を「メイク」「ピアスの穴をあける」「歯の矯正」と同程度に捉える傾向は、美容整形の経験あり群、経験なし・興味あり群、経験なし・興味なし群の順に高い。中でも「メイク」という、選択肢の中で最も日常的な行為と同程度に捉える傾向は、経験なし・興味なし群は著しく低い。このことからは、経験も興味もない群においては、美容整形を比較的身近でないものと捉えていることがうかがえる。また､「タトゥー」「美容ダイエット」「医療手術」と同程度に捉える傾向は、経験なし・興味なし群が高くなる傾向にある。タトゥーや医療手術は、非日常的な、場合によってはネガティブなイメージを伴う行為であり、経験なし・興味なし群にとって美容整形が重大で、ネガティブなものだということがうかがえる。また、「美容ダイエット」「医療手術」と同程度に捉える傾向は、美容整形の経験あり群のみが著しく低い。美容整形の経験によって、他の経験とは異なる特別なものとして、美容整形を捉えていることがうかがえる。

図表３からも、美容整形の経験あり群、経験なし・興味あり群、経験なし・興味なし群の順に、ポジティブな記述が多いことが明らかである。特に美容整形経験群は、すべての回答者がポジティブな記述をしている一方で、経験なし・興味なし群においては、ポジティブな記述よりもネガティブな記述をする回答者の割合が高い。

したがって、美容整形を実際に経験する人は、美容整形を日常的なものであると捉え、ポジティブに記述できる傾向にあるといえる。その一方で、美容ダイエットとは異なるといった、美容整形を特別なものとする捉え方もう

かがえる。美容整形に対する独特の捉え方が、美容整形を実際に経験することを促している、ともいえる。

では、美容整形を経験する人たちのその独特の捉え方とはどのようなものなのだろうか。この点について、次のインタビュー調査で明らかにすることとする。

3．インタビュー調査

前節では、美容整形の経験者が、美容整形に対して独特の見方をしている可能性が示唆された。そこで本節では、美容整形の経験者に対するインタビューを分析することにする。

3－1　インタビュー調査の概要

まず、インタビューに応じてくれた協力者の概要を、図表4にまとめる。

＜図表4　インタビュー対象者一覧＞

名前（仮名）	現在の年齢 （整形当時の年齢）	経験した美容整形の内容
Aさん	22（18）	二重埋没、目頭切開、クマ・脂肪取り、鼻筋、唇、涙袋のヒアルロン酸注射
Bさん	22（20）	二重埋没
Cさん	22（20）	二重埋没、頬・顎下の脂肪吸引、ボトックス、黒子除去
Dさん	18（18）	二重埋没

インタビュイーはみな、20歳前後であり、質問紙調査の対象者と同年齢である。美容整形の種類もそれぞれ異なっているが、全員が「二重埋没」を受けている。これは、二重埋没が、美容整形の中でももっともポピュラーな施術であるからだ、と推察できる。

4名は、美容整形に対して基本的にはポジティブな態度を示している。ただし、以下で述べるように、美容整形に対する警戒心や不安をまったく抱いていないわけではない。そこで次に、4名が美容整形に対して抱く感情を具体的に示しながら、比較的身近で、重くはないと捉える内実を明らかにする。

３－２―１　美容整形経験者の語りから見る美容整形に対する抵抗感

質問紙調査では、美容整形に対するネガティブな記述が多く見られた。それらは、様々な面で美容整形に対する抵抗感を示すものであった。例えば、「**少しだけ抵抗があります**」（経験なし・興味あり）、「**料金・リスクなどから壁を感じる**」（経験なし・興味あり）、「**顔を大きく変えるというイメージで否定的**」（経験なし・興味あり）、「**ネガティブなイメージが少しある**」（経験なし・興味あり）、「**受け入れるのが難しい**」（経験なし・興味あり）、「**受け入れにくいところがある**」（経験なし・興味なし）といった記述がそれにあたる。

では、美容整形を経験した人は、こうした抵抗感を最初から抱かなかったのだろうか。この点についての語りを以下に引用する。

３－２－２　美容整形は「コスパが良い」

Ａさんは、美容整形を、「**コスパ良くない？**」と語っており、ここには微塵も抵抗感を示す表現はない。Ａさんにとって整形とメイクは「**それはもう一緒**」であり、メイクをするときに二重埋没をしていなければ「**アイプチするじゃんみたいな**」、というようにアイプチと二重埋没は同じようなものである。そして「**その〔＝アイプチをする〕時間短くなってコスパ良くない？**」という感覚に至るのだという。とりわけ、最近は整形技術の進歩により、「**〔二重〕埋没も最近カジュアルで当日にそのままメイクできたりとかもあるからカジュアルな感覚**」で捉えている、と語る。

とはいえ、Ａさんは最初からまったく抵抗がなかったわけではない、という。図表4のとおりＡさんは、複数種の美容整形を経験しているが、最初に経験したのは、「二重埋没」という比較的ポピュラーなものである。そこから、「**一個ずつ別で追加で**」「**徐々に徐々に**」他の整形もしていった、という。抵抗感が最初からまったくなかったわけではなく、「**それ〔＝抵抗の変化〕はあるある～**」、と語っている。「**最初やるのにあたって情報集めとかして、あー、意外となんかやってる人多いじゃんみたいな、なんか感覚がね、そんな重いものとして捉えなくなったから、私からしたら美容院行くのと同じ感覚みたいな**」と語っており、多くの人がやっているという情報を得たことで、美容整形を身近なものとして捉えるようになり、抵抗感がなくなったのだと語っている。

こうしたＡさんの思いを後押ししたのは、美容整形に対する周囲の積極的な評価だ、と考えられる。Ａさんは次のように語っている。「**えー、私の周りは〔ネガティブな反応の人は〕いないっていうか、私の周りほぼ全員どこかしら〔美容整形を〕やってるから、類は友を呼ぶじゃないけど。〔中略〕『どこでやったんだろ』、『先生教えて』、『私もそこでやりたい』、みたいな。だから『整形してるんだ～』って〔引かれるようなことを〕私は経験したことないけど**」。この語りからは、Ａさんの周囲にも美容整形経験者が多く、当初に収集した情報が実感を伴って裏打ちされていることがわかる。すなわち、周りの人たちが自分と同じように経験している、ということは、美容整形に対する抵抗感を解消してくれる大きな要因であることがうかがえる。

と同時に、Ａさんのこの語りには、上記の中略部分において、「**むしろ『この子整形なんだって～』って話になると『良かった～』ってなる。**」という表現が含まれており、別の一面も示唆されている。それはすなわち、周りに同じ経験者が多いとしても、その外側にいる、美容整形の未経験者と自分たちは違うのだ、という感覚である。同じ経験を共有する者同士で話せることは、「**良かった～**」という安堵感を伴うことなのである。

こうした周囲の反応の中でも大きな影響をもつのが、家族、特に親の反応である。Ａさんの親は、当初こそ積極的ではなかったが、Ａさんの判断に対して強い否定はなかったという。「**なんか別にやんなくても良くない？　みたいな。やるなとまでは言わないけど、やんなくても良くない？って〔中略〕言ってたけど、私が毎日アイプチしながら、それがめっちゃ時間かかったのね、『本当に面倒くさいんだけどこれやだ～』って言ってたら、『じゃあいいよ～』って言ってくれた〔中略〕そんな別に反対派でもないし**」。Ａさんのこうした語りからは、実際の施術に対して、親は納得してくれていることがうかがえる。

３－２－３　美容整形の抵抗感を減らすもの

二重埋没のみを経験しているＤさんも、Ａさんと同様、「**もともと面倒くさいなって思ってたし、毎朝アイテープするのがね**」と語っており、面倒くささがきっかけの一つになっている。さらに、通っている学校の都合上、アイプチが認められないことも、きっかけの一つになっている。そして二重埋没の施

術を受けた結果、「**やっぱ前よりは化粧の時間もめっちゃ短くなった**」と感じており、「**最近の二重とか涙袋とかってなかもう整形っていうよりほんと化粧の延長じゃない？って思う**」と語る。

Ｄさんは、美容整形の経験を隠したいという気持ちがないという。「**私はあんまり友達とかに整形のこと隠してなくて、夏休み明けにも学校の子とかになんかわかりやすかったから、『埋没したんだ～』みたいなこと言ったら『え、なんかすごい目くりくりしてんなって思ったよ』とか言われたら『私はこの選択間違ってなかったんだな』って、自分以外の人にも肯定されてるから**」嬉しかった、と語っている。周囲の肯定的な評価が、美容整形後にも、自身の経験に対する抵抗感を解消していることがうかがえる。

また、Ｄさんの家族もＡさんの家族と同様、当初こそ反対していたものの、Ｄさんが自ら行動に移してからは受け入れていることが、次の語りからうかがえる。「**前は反対されてた。でも自分の意思でできるようになったからちゃんと本格的にカウンセリング行って値段もこれくらいだしみたいな、って言ったらまあ『自分がいいんだったらいいんじゃない』みたいな感じになって、まあなんだろう『いいねいいねやんなやんな』って感じではなかったけど、前よりかは『まあいいんじゃない？』みたいな。行動を結構したら、そのカウンセリング行ってとかしたら、まあ『自分がそんだけやりたいんだったらやっていいんじゃない』みたいな**」。必ずしも積極的なサポートではないとしても、家族から反対はされていないことが、Ｄさんの抵抗感の少なさの要因になっている、と推察できる。

以上のＡさんとＤさんの語りからは、美容整形の抵抗感を減らすものは、「多くの人がやっているという事実」や、周囲からの肯定的な受け止め方だ、という推察ができる。多くの人がやっているということは、その多くの人が美容整形をポジティブに受け止めているということを間接的に示している。したがって、両者は基本的に同じことであり、周りからのポジティブな受け止めがあれば、抵抗感は軽減される、と考えられる。

こうした抵抗感の軽減に、家族の評価は大きく影響する。Ａさん、Ｄさんの語りからも家族の影響が感じられるが、次のＢさんとＣさんの語りの比較から

は、よりそのことが明らかになる。

３－２－４　家族の支え

親の影響を検討するために、次に、Ｂさんの語りを考察したい。Ｂさんはもともと二重だったが、その二重幅を広げるための二重埋没のみを今のところ経験している。Ａさんと同様Ｂさんも、「**アイプチとかにかけてる時間でさえも惜しい**」と思いその時間節約のために、「**社会人になるのとまあ区切りがちょうど良いなと思って**」施術を受けた、という。

Ｂさんは、Ｄさんと同様、美容整形そのものにまったく抵抗がなく、周りに知られることも気にしないという。「**〔周りの人からの視線が気になること〕も、ないね。人によってはさ、隠す人もいると思うんだけど、埋没といえど。むしろ、私の場合は『やりたいやりたい』って〔周りに〕言ってたのもあるから、むしろ自分から発信じゃないけど、『見て、埋没やったの』みたいな感じで**」と語っており、抵抗感どころか、より積極的に自身の経験を発信しているという。実際、施術の当日に会った友人には、「**包み隠すつもりもなかったから、友達と合流して、『ごめん今日ちょっと目やってきたから腫れてるけど許して～』って感じ**」で、経験を直接的に伝えている。

その背景には、Ｂさんの家族の価値観がある、と考えられる。Ｂさんは、Ｂさんの親やきょうだいも美容整形を経験している。「**あ、親も妹もやってるから。病院は違うけど、『あたしもやってくるわ』って言ったら、『いってらっしゃい』みたいな。（中略）あんまマイナスなイメージはなかった。**」という。つまりＢさんの抵抗感をなくしたのは、家族自身が、整形を経験するという形で、美容整形に対して全面的にポジティブな態度を示していることだ、と考えられる。

３－２－５　美容整形の価値を周囲から支えられないとき

他方、Ｃさんだけは、美容整形に対して、他の3名とはかなり異なった感覚を抱いていることが、語りの端々から感じられる。

「**元々奥二重で、高校生の時とかに夜用のアイプチみたいなのやってて、結構安定はさせてたけど、右目だけ全然クセがつかなくて埋没しちゃった。ア**

イプチとか面倒くさいなって思ってやっちゃった」。美容整形を経験したきっかけをCさんはこのように語っており、Aさん、Bさん、Dさんと同様に、メイク時の面倒くささを回避することが目的だった、という。ただし、Cさんの特徴は、単に面倒だとか時間がかかるといったことだけでなく、アイプチではうまくクセがつけられないことがきっかけになっている。つまり、より美しい目の形を求めたことがきっかけだという。

そんなCさんは、「**えー、〔美容整形は〕メイクの延長線上だと思う**」と語っており、この点でも他の三名と同様である。ただし、実はCさんは、必ずしも美容整形を、カジュアルなものとはとらえていないことが、続く「**まあ確かに簡単にやっちゃいけないことかもしれないけど**」、という語りからうかがえる。Cさんは、実は美容整形を、簡単にやってはいけないことだ、と捉えている。また、周囲からは美容整形を必ずしもポジティブに捉えられていないと感じていることも、次のように吐露している。「**友達にもそうやって〔＝美容整形で得た良い見た目は『整形じゃん』って〕言われるから、それはむかつく。友達にはいろんな人に言いふらされてる。特に男の子に。それはめっちゃむかつく、くそー！って。なんでわざわざ言うんだろうって思う**」。Cさんにとって美容整形の経験は、秘匿すべきことであり、それを指摘されることは「言いふらされて」いると感じることなのである。そしてそれは、腹立たしいことだ、と語っている。

Cさんの親は、美容整形に対して肯定的な態度を示しているわけではない。Cさんが最初の美容整形「二重埋没」を経験したのは未成年のときで、親の同意書が必要だったが、当時についてCさんは次のように語る。「**最初は『え？』って言ってたけど、『整形したい整形したい』って言ってたら『お金貯めてやればいいじゃん』って言われた。それで同意書はもらえた**」。つまり、未成年にとって高額な施術費用を親が負担するという考えはなく、積極的な同意はなかった、とわかる。

とはいえ、最終的に同意書を書いたCさんの親は、強硬的に否定していたわけではない。その理由を、Cさんは、「**〔二重〕埋没だったからっていうのもあったかもしれない**」、「**浸透してるやつだから埋没は。あと人気なやつだから許してくれたのかもしれない。埋没だったからめちゃくちゃ反対するものでも**

なかったんだと思う」、と捉えている。ただそのときも、「**絶対だめとまでは言われなかった**」けれども、「**まあ最初は何でやるのって感じだった**」、と語っており、親の抵抗感を強く感じ取っていることがうかがえる。実際、二重埋没以外の美容整形については、「**二十歳過ぎてからだから、自由にやった。親にも何も言わずにやった**」のだという。親にとって自身の美容整形が望ましいものではなく、親の同意を得る必要がなくなってから受ける方がよい、というＣさんの思いが感じられるのである。

Ｃさんがこのように感じるのは、一つには、最初の術後、「**やったら『良かったね』って**」と言ってくれる一方で、「**まあでもその二重は『整形じゃん』って言われたこともある**」というような、親のアンビバレントな態度に起因する、と推察される。しかも、整形だという指摘に対してＣさんは、友人に指摘された際とは異なり、「**親だからあんまり思うことはなかった**」と語っている。このことからは、Ｃさんが、親の否定的な態度を感じ取りつつ、そうした親の態度は妥当なものだ、と捉えていることがうかがえる。つまりＣさんは、美容整形に対して、友人だけでなく親からも否定的な態度を経験しており、しかも親からのそれは妥当なものだと捉えていることになる。美容整形は良いものだ、という価値観を周りから認めてもらえないＣさん自身もまた、美容整形に対して、どこかで否定的な感覚を抱いているのだろう。

３－３　美容整形施術前と後についての語りから見られる「本当の自分」感

３－３－１　不可逆性への抵抗と自己感

質問紙調査からは、美容整形の不可逆性が、ネガティブな記述と関連していることがうかがえる。例えば、「**髪切るとかと違って彼女がするなら一言報告は欲しい**」（経験なし・興味あり）、「**1度整形したら一生整形をした人というレッテルを貼られる人生を生きなければいけないイメージ**」（経験なし・興味あり）、「**よーく考えてやらないといけない、戻せないから**」（経験なし・興味なし）といった記述である。

こうした不可逆性は、「**顔を物理的に変えてしまったらおんなじ人間なのか？受け入れるのが難しい**」（経験なし・興味あり）、「**個人的な元々のアイデンティティを失うようで受け入れにくいところがある**」（経験なし･興味なし）、

といった記述に見られるように、施術前と施術後では「同じ人間」という同一性を保てない感覚に付随している、と考えられる。その背景には、「**整形した人はみんな同じような顔をしている**」（経験なし・興味あり）というような、没個性化、同一化に対する懸念もあれば、「**傷をつけるという点からマイナスイメージが強く**」（経験なし・興味あり）というような、施術前の身体を神聖視する感覚も指摘できる。

では、美容整形の経験者は、美容整形の前と後とで、どちらが本当の自分だと感じているのだろうか。次にこの点に関する語りを抽出したい。

３－３－２　不可逆性への抵抗感のなさ

整形前の状態には二度と戻れないことに対して、次のような語りが見られる。「**え、全然いい。なんか前の顔に執着がある人って整形しないと思うし、別に前の顔が恋しいとかさみしくなっちゃうな～とかはそんななないね。別に**」（Ａさん）。「**その先生の技量、技術にもよる気がするんだけど、結局自分でカウンセリング行って、『これくらいの二重にしたいんです』っていうの、CMとかでもあるじゃん、あれで結局自分で幅決められたりするからな～、戻らなくて良いとさえ思う**」（Ｂさん）。ＣさんとＤさんからは、不可逆性についての語りはなかったが、基本的に整形後の自分に満足していることからは、不可逆性を危ぶむ気持ちはないことが推察される。

さらに、Ｂさんの「**うーん、まあ戻れはしないけど、自分で決めた二重幅に対してはあんまりその『直せないじゃん』みたいなものに関しては特に何も考えてない**」という語りからは、「戻れない」ことの問題が、美容整形によって意図していた結果が得られなかった場合にのみ、すなわちいわゆる整形の失敗時にのみ発生するだろう、というＢさんの自然な感覚が読み取れる。Ａさんも、整形は戻せないことについて、「**私は今の先生の仕上がりに満足してるから**」と答えており、これらはＡさんとＢさんに共通した問題意識だ、と考えられる。他方、質問紙調査から浮かび上がったのは、失敗した際に戻れないことへの懸念ではなく、美容整形前の自分と整形後の自分の同一性が保持できなくなることへの懸念である。ここに、美容整形への態度を決定づける大きな違いが見て取れる。

３－３－３　本当の自分という感覚

では、美容整形の経験者は、施術前と施術後の自分の同一性をどのように捉えているのだろうか。語りからは、基本的に4名とも、施術後が「自分ではなくなった」という感覚は抱いておらず、むしろ、施術後の自分を自分らしいと捉えていることがうかがえる。

まず、Dさんの語りから見てみよう。Dさんは、大がかりな美容整形を受けることに対しては不安があるという。「**まだなんか手術がさ、〔中略〕メスも使ってないから、そんなに恐怖はなかったけど、これがその顎切ったりとか鼻とかになったらさ、全身麻酔になるからさ、その起きる可能性がないっていうこともゼロじゃないみたいな、そのまま死んじゃうかもしれないみたいなことが聞いたことがあるからそれはちょっと怖いなって。多分もしまたやるんだったらすごい身構えちゃうと思う**」。ただしその理由は、死への恐怖感であって、「**自分が自分じゃなくなっちゃうとはなんないかもしれない**」（Dさん）。ここからも、美容整形への失敗への懸念はあっても、それによって自己が解体したり変質するといった不安を抱いているわけではないことがうかがえる。

また、Aさん、Bさんは、「**前に比べたら今の方がいいなって思うね、てか今の自分が本当の自分だと思って鏡見てる**」（Aさん）、「**自分で決めた新しい自分だから今の整形後の方が本当の私だと思ってる。**」（Bさん）と語っており、術後の自分こそ自分らしいと明言している。

こうした「自己感」は、Cさんの、より好ましい自己像に関する語りにおいて顕著になる。Cさんは以下のように語る。「**私は〔もとの顔に〕満足しないからそうやってやっちゃうけど、〔化粧のように〕落とすとか落とせないとかじゃなくて、よく整形に反対する人って『親にもらった顔にどうのこうの』って言うと思うんだけど、そうじゃなくて、せっかく親からもらったんだから可愛い顔で生きたいって思っちゃうから、延長線上じゃないかなって。メイクでは無理なコンプレックスを隠すというか、その方が私らしい**」。Cさんにとって、自身の元の顔よりも、現在の顔の方が価値が高く、そのように自分を感じられることこそが、親にもらった身体を大切にすることなのだ、というのである。

以上の4名の語りからは、美容整形を積極的に経験する人たちにとって、不可逆性はむしろ望ましいことであること、その背景には美容整形によって得られた姿こそ自身にとって望ましいものであることがうかがえる。美容整形に対するネガティブな見方には、生まれてきたままの身体こそが「本当の自分」である、という感覚が大きな影響をもたらしていることからすると、美容整形への抵抗感の違いは、前項で考察したように周囲の支えの有無だけでなく、自分の身体をどのようなものと捉えるか、という違いにもよることが推察できる。

３－３－４　「原型」という感覚の残滓

しかしながら、美容整形を経験した者がみな一様に、美容整形という方法で望ましい姿を得ることを、全面的に良いと捉えているわけではない。これは、前項でＣさんの「言いふらされる」という語りに基づいて検討した通りである。また、こうした秘匿したさ以外にも、美容整形に対する慎重な姿勢からは、美容整形を手放しで受け入れられない経験者の思いが見えてくる。

とりわけ目立つのは、美容整形を一度経験すると、際限なく繰り返してしまうことへの不安である。これは質問紙調査においても懸念されていることだが、実際、4名全員が、二重埋没の施術後の仕上がりに満足するだけでなく、さらに美容整形をしているか、あるいは現在は二重埋没しか経験していないが今後別の美容整形をしたいと感じるようになった、と語っている。

例えばＢさんは以下のように語っている。「**私も二重やって、左右対称も全く対象にはできないと思うんだけど、自分の元々の目の筋力とかもあると思うから。でもやっぱ気になるよね。私もちょっと違うと思うんだ二重の幅が。二重やったけど、今それめちゃくちゃ直したいし、目頭切開とかやりたいものは増えるよね。人中短縮[8]とかね。怖くないっていうのがわかっちゃうから。自分の理想の顔に近づけていきたいっていうのはやっぱ出ちゃうかもしれない**」（Ｂさん）。またＣさんも「**整形してからもっと可愛くなりたいって思うようになって、もっと人と比べるようになったかもしれない**」と語っており、Ｄさんの「**でもなんか中毒になりすぎないようにしなきゃなみたいな気持ちもあって、一度やったらやりたいとこ増えちゃったなっていう感じ**」という語

りにも見られるように、美容整形の経験は、満たされるというよりも、新たな刺激になることがうかがえる。なぜだろうか。

美容整形に対して、他の3人とは少し向き合い方の異なるCさんの語りには、その理由が明確に現れている。Cさんは次のように語る。「**一回経験しちゃったから。私は成功した方だから、本当に世界が変わって写真写りも良くなったし、結構これは望んでないんだけどモテるようにもなったから、これを経験しちゃったら、もっと上を目指したいって思うようになって、あとも何のためらいもなくやった。もっと理想を追い求めちゃうの**」（Cさん）。Cさんは自ら精神面の弱さを自覚しており、また周囲に比べて自分の見た目が劣るという強い認識があった。そのようなCさんにとって、美容整形は、あまりに大きな経験であったのだ。実際、「**整形前は見た目に関してここまで深く考えることも無かった**」（Cさん）とも語っており、美容整形には次の美容整形を誘発する強い刺激があることを、自覚し懸念しているのである。

Cさんに比べればこうした中毒性をあまり感じていないとしても、BさんもDさんも、中毒性に対して警戒感を示している。「**けど、でもだからといってがらっと顔を変えるのは嫌だからそれは留めてる**」（Bさん）、「**うーんなんかやりたい気持ちはあるけど元の顔が原型はある状態ではありたいなみたいな感じ**」（Dさん）といった語りに、その思いは表れている。

ここからうかがえるのは、美容整形経験者は前節で考察したように美容整形後の自分を「本当に自分」と捉えていながらも一方で、施術前の自分を「原型」、すなわちオリジナルなものだと捉えていることである。「本当の自分」には、原型である施術前の自分という要素がありながらも、施術後の自分の方が自身にとって望ましいものであるから、施術後の自分という要素をより強く捉えている。

こうした奇妙な認知のゆがみは、しかしながら珍しいものではない。というのも、美容整形の経験者には、美容整形を自らの努力と捉える気持ちが強いからである。Bさんは家族も美容整形を経験しているにもかかわらず、あえて成人後に美容整形をすることを選んでいる。それは、親の同意書を得るのではなく「**ちゃんと自分の意思だけで受けたかったのもあった**」（Bさん）からだ、という。またBさんは、自身が美容整形を経験したことを自ら積極

的に伝える理由を、「**自分が努力したことっていうかやりたいことやって非難されるのはね、腹立つじゃん。だから、自分から言って、有無言わせません、みたいな感じかな**」（Bさん）と語っている。つまり美容整形は、Bさんにとって、自らの努力と決断によって獲得した経験なのである。同様にDさんも、「**自分が、なんていうんだろう、可愛くなるためにお金かけて手術して、その前にそうだ、病院探したりいい先生探したりとかもあるし**」（Dさん）と、美容整形のために多大な努力をしていることを語っている。

例えば勉強して学力が高くなった学生は、努力前の自分の学力がオリジナルなものとして存在していることを知りつつも、本当の自分の学力は努力後の方だ、と捉えることが多いだろう。おそらくそこには、より良いものを自分自身として捉えたいという願望だけでなく、そこに到達するために行った努力もまたその人自身に固有のものとして、本当の自分自身からは切り離しえないかたちで体験されていることが影響している、と考えられる。美容整形もまた、本人は様々な努力でその費用を獲得し、より良い病院や施術方法を調べるなどの努力を重ね、失敗したらといった恐怖心とも戦いながらたどり着くものである。こうした道筋が、原形の自分と施術後の自分の危うい均衡を保たたせている、とも読み取れる。

4．考察

本研究では、質問紙調査とインタビュー調査から、美容整形の経験を可能にする正体をさぐってきた。質問紙調査では、美容整形への経験や興味の有無が、美容整形に対する否定的、肯定的な感覚とそのまま結びついていることがわかった。特に、不可逆的な整形に対してマイナス思考の考え方がいくつか得られた。他方、実際に整形を経験した4名からは、不可逆性という整形の特徴をマイナスに捉えることはなく、新しい自分が本当の自分でありむしろプラスなものとして捉えているといった語りが得られた。

こうした感覚の背景には、次のことが指摘できる。美容整形に対する抵抗感は、周囲の価値観の影響を受けやすいということが第一点である。友人や家族から自分の経験を肯定されることは、美容整形に対するポジティブな感覚と直接的に結びついている。それゆえ、もしも周囲が美容整形に肯定的で

あれば、「親からもらった体にメスを入れることの抵抗感」といった感覚は、軽減される、と考えられる。

また第二に、抵抗感と結びついている「親からもらった体こそ本当の自分だ」という感覚もまた、周囲の価値観によってつくられたものだ、ともいえる。美容整形を経験したり肯定的に捉える人びとにとっては、美容整形という努力によって獲得された自分こそが本当の自分なのであるが、これもまた、周囲の価値観の影響を受けながらつくられていった感覚にすぎない。このように、「本当の自分」感は、美容整形への態度にかかわらず、実は極めて危ういものでしかないこともうかがえる。

と同時に、だからこそ、この均衡は容易に崩れかねないことにも最後に注意を払っておきたい。美容整形の価値を周りに認めてもらいにくい状況にあるCさんは、美容整形そのものに対して、アンビバレントな態度をとっている。次のCさんの語りからは、その複雑な思いが読み取れる。「**整形してからもっと可愛くなりたいって思うようになって、もっと人と比べるようになったかもしれない。だから本当に去年の12月か、本当にメンタルがやばくて、自分なんでこんなに可愛くないんだろうっていうのが最高潮になって。周りはもっと可愛いの。で、整形を経験しちゃったからもうそのメイク以上の手段を知ったわけで、整形後の理想がどんどん高くなっちゃって、そこに自分が追いつけてないから、急に夜泣き出したりとかしちゃって、一人の時に。なんか本当に死にたいなって、あのときは本当に死にたいなって思ってた。整形する前は病むことあってもこんなに病んだりすることもなかったのに、整形したら余計顔、見た目のことについて考えるようになった。**」（Cさん）。可愛くなりたいという理由でたくさんの努力を重ねて経験した美容整形によって、実際により望ましい容姿を手に入れたにもかかわらず、Cさんは、施術後の自分は「**なんでこんな可愛くないんだろう**」という思いにむしろ強く囚われている。これまでに考察したように、ひとが捉える「本当の自分」とういのは絶対的なものではなく、オリジナルなものから努力して獲得するものまで、さまざまである。親からもらった体にメスを入れることに抵抗感があるといった美容整形への否定的な態度に内包されている「親からもらったからだ」という「本当の自分」感もまた、その揺らぎの中にある。だからこそ一方で、獲得され

た「本当の自分」感もまた、容易にゆらぐ危うさの中にあることがうかがえるのである。

引用文献一覧

叶秋男（2011）「美容整形ブームの憂うべき背景」『Window to East Asia』6巻 pp.68-68,北陸大学東アジア総合研究所

川添裕子（2011）「流動的で相互作用的な身体と自己：日本の美容整形の事例から」『国立歴史民俗博物館』169 巻pp.29-54

N. A. Rudd & S. J. Lennon (1999) “Social power and appearance management among women” Appearance and power,pp.153-172

斉藤秀子 柳津元子料 呑山委佐子（2006）「補整下着，化粧，美容整形に対する意識についての事例的研究 -若年群と中年群との比較」『日本衣服学会誌』50 巻 1 号 pp. 43-51

谷本奈穂（2008）『美容整形と化粧の社会学― プラスティックな身体』新曜社

谷本奈穂（2017）「美容整形というコミュニケーション：外見に関わり合う女性同士」『フォーラム現代社会学』16 巻 pp. 3-14

謝辞

本研究に協力くださった方々、特に美容整形という語りにくい事柄を語ってくださった4名の協力者に、心よりお礼申し上げます。

注

1　「第３回全国美容医療実態調査　最終報告書（公表版）」による2017年度の結果を2016年の国の統計にあてはめると、アメリカ、ブラジルに次いで第3位に相当することになる。ただしこの統計には、「整形大国」と呼ばれることもある韓国や中国の施術数が含まれていないため、施術数世界三位がたしかだとはいえない。

2　矢野経済研究所『2022 美容医療の展望と戦略 ～市場分析編～』yano.co.jp/market_reports/c64103100, 2023年3月13日閲覧。

3　医療法人社団心紲会。東京都新宿区 総院長・吉種克之。

4　「世代別／美容整形とコンプレックスについて」実施日程は2019年11月5日～11月6日の2日間、16歳～39歳の女性550名へのアンケート形式インターネット調査（https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000017.000026711.html,2023 年 1 月

11日閲覧）

5　なお、この質問紙調査は、筆者らの周囲にいる大学生の意識の概要をつかむために実施しており、統計的な検定等によって量的な実態をつかむものではない。

6　クロス・マーケティング「【美容整形】に関する意識調査」https://www.syogyo.jp/report/2011/03/post_006334

7　以下、質問紙やインタビュー調査における、回答者の言葉をそのまま引用する際には、ゴシック体を用いる。

8　人中短縮とは、鼻と上唇の間を短くする美容整形手術のことである。

ABSTRACT

A study about the feeling of "real self" seen by those who have undergone cosmetic surgery

Aiko MATSUSHITA
Noyuri ENDO

The medical practice of cosmetic surgery, which has become popular among young people in recent years, is seen positively by some, and negatively by others. In particular, those who perceive it negatively tend to perceive the body before cosmetic surgery as an absolute original, and seem to be concerned about the danger of irreversible changes to such a genuine body. So what do people who undergo cosmetic surgery think of their real bodies? Also, don't you feel the risk of giving your body an irreversible change? Based on a questionnaire survey and an interview survey, this study focuses on such bodily sensations and aims to clarify how people who have undergone cosmetic surgery perceive their "true selves."

In the questionnaire survey, it was found that experience and interest in cosmetic surgery are related to negative and positive feelings about it. In particular, the irreversibility of cosmetic surgery has caused a sense of incongruity in the sameness before and after cosmetic surgery, and has been a factor in negative perceptions. On the other hand, from the interview survey, it is clear that those who actually experienced cosmetic surgery felt that irreversibility was a positive aspect of it, and that they felt that they were their "true selves" after cosmetic surgery.

From the above survey, the following three points can be pointed out.

First, resistance feeling to cosmetic surgery is easily influenced by the values of those around them. Second, the sense of “true self” is also created by the values of those around us. Thirdly, this belief of those who affirm cosmetic surgery and think of themselves as their “real selves” after cosmetic surgery is also prone to crumbling.